

英語史は役に立つか？—英語教育における英語史の貢献—

田辺 春美

1 はじめに

近年、文学や歴史学等の人文研究は洋の東西を問わず実業界で職務を遂行するのに「役に立たない」と考えられるせいも、大学の中でも旗色が悪い。そのような時代の流れの中で、古英語や中英語で書かれた文献の研究はご多分に漏れず「役に立たない」ものの一つと容易に見なされるに違いない。しかしながら、英語をよりよく知るために英語がどのように変化して来たのか、あるいは今変化しようとしているのかを理解し、また先人の残した貴重な文化遺産である古英語・中英語・近代英語期の文献を読みこなし、さらなる研究をすすめて次の世代に引き継いでいくことも、大いに意義のあることであろう。

英語史の研究の意義について、小野茂東京都立大学名誉教授は、第1に純粹に過去の時代における英語の姿を知ること（考古学研究等に類似する立場）があり、第2に現代英語をよりよく知るために過去にさかのぼりその成り立ちを知ろうとすることであると述べた。堀田隆一氏は、「英語史ブログ」でなぜ英語史を学ぶのかについて以下のように5つにまとめている。¹

- 1 現代英語の文法や語彙が学びやすくなる。
- 2 英語の過去を通じて英語の未来を意識することで、能動的・戦略的に英語を学ぶ姿勢が身につけられる。
- 3 言語は変わるものであり、多様なものであるという許容的な言語観が形成され、おおらかに英語を学べる、あるいは教えられるようになる。
- 4 英語史は一つの物語であるから、おはなしとして面白い。
- 5 研究分野として純粹に面白い。

1 堀田隆一、「hellog～英語史ブログ、#24. なぜ英語史を学ぶか」2009.5.22
〈<http://user.keio.ac.jp/~rhotta/hellog/2009-05-22-1.html>〉2017.5.4 閲覧。

1と2は、上記の第2の意義に、4と5は第1の意義に重なるであろう。将来英語教師になろうとするものにとって、1と2の知識は役に立つであろうし、3の言語変化に対する許容的な態度の涵養も重要なことである。

本論は、日英・英語教育学会（Japan-British Association of English Teaching、略称 JABAET）からの依頼に応じて、2015年3月8日（日）神戸研究学園都市大学交流推進協議会の大学共同利用施設 UNITY においておこなった第13回研究会の講演を基にして、英語史が英語学習や英語教員養成にどのような役割を果たすことができるかを論じたものである。

2 英語史は英語教育、英語学習に役立つか？

英語史が英語教育、英語学習に役に立つとしたら、どのように役に立つのか考察してみたい。まず第1に、英語史の知識があると、学習スタイルの異なる学習者に対応できるようになる。例えば、ありがちな例として、教師と学生との間で以下のようなやり取りが起こりうる。

例： 生徒 「will と shall はどちらがうのですか？」
先生 「… 君は今そんなことは気にしなくて良いから」
生徒 「？」

これは本学の卒業生が高校在学中に実際に体験したやりとりである。中学・高校の現場では、英語によるコミュニケーション能力の養成に力をいれるようになった反面、文法の指導は学校によっては省略される傾向がある。そのような学校では、上記のような質問はコミュニケーション能力の養成は「役に立たない」として退けられるかもしれないが、大勢の生徒・学生はそれぞれ個性があり、理屈っぽい質問は知的好奇心のあらわれでもある。そのような知的な好奇心の芽を摘んでしまって良いはずがない。

そのような生徒の関心を育てるにはどうしたらよいのか？ Schmitt and Marsden (2006: v) も上記と同様の状況が英語教師におきることを述べ、解決法として歴史的説明をすることを勧めている。

Perhaps you have found yourself confronted by awkward questions from your students such as:

Why is *night* spelled with *gh*?

Why does English have so many synonyms like *intelligent*, *clever*, *astute*,

and *bright*?

You may have found yourself at a loss for satisfactory responses, and you may have had to provide vague answers, such as “That’s just the way it is.”

Luckily, there are historical answers to these questions. (The underline is mine.)

上記にあるように、生徒や学生の質問に曖昧な返答をしてしまうと、彼らは学力のいかんにかかわらず必ず教師が何かをごまかしたことを察知し、その体験は教員と生徒・学生間の信頼関係を損ねてしまうかもしれないし、極端な場合は英語嫌いの生徒・学生を作ってしまうことになりかねない。

次の利点として、教師が単に英文法の知識を持つだけでなく、自信を持って自らの英文法感を持つことが重要であり、英語史はその下を支える役割をもつことができる。すなわち、文法は規範的な規則の集大成ととらえるのではなく、外的世界をきりわける道具として機能していることも理解する必要がある。例えば、加算名詞には不定冠詞をつけ、不可算名詞には何もつけないというルールがあるのではなく、物体を非連続の有限なものとして見なしているから不定冠詞を付ける。A chicken のように不定冠詞 a を付加することにより、一羽の独立した鳥としての「鶏」を意味することになり、何も付加されていないければ連続した塊としてみなしていることになり、物質名詞として「鶏肉」を意味することになる（マーク・ピーターセン、1988: 10-19; 久野・高見、2004: 1-14）。何故不定冠詞の a がそのような有限（definite）な個体を意味するのかは、不定冠詞 a が数詞の one（古英語では an）から発達したことを知れば、容易に理解できるであろう。

3 英語に関する FAQ

この節では、実際に英語の初学者が抱きがちな疑問点に対して英語史の知識を使ってどのように答えたら良いのかを解説する。本論で用いる英語史の時代区分は以下の通りである。

古英語（Old English, OE）	450-1100
中英語（Middle English, ME）	1100-1500
近代英語（Modern English, ModE）	1500-
初期近代英語（Early Modern English, EModE）	1500-1700

後期近代英語 (Late Modern English, LModE) …… 1700-1900

現代英語 (Present-day English, PDE) …………… 1900-

3.1 なぜ tooth の複数形は teeth なのか？

Tooth-teeth, foot-feet, goose-geese, mouse-mice, louse-lice, man-men, woman-women は母音の音を交替させて複数形を作る不規則変化の名詞である。この現象は母音変異 (Mutation, Umlaut) と呼ばれ、ゲルマン諸語に4世紀以降起きた不規則な複数形の一つで、強勢のある音節の a, o, u が、強勢のない次の音節の i, j の影響を受けて i に近い音に変化する。I-mutation, i-Umlaut とも呼ばれている。以下の図1にあるように、高母音の u は i に、o は e に、a は e に横滑りして変化することがわかるだろう。

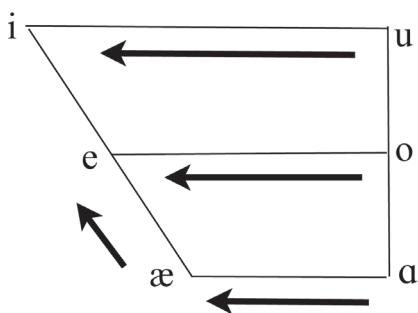


図1 i-mutation による母音の移動

表1 ゲルマン祖語の *fot の活用

	単数	複数
主格	*fot	*fot-iz
対格	*fot	*fot-iz

ゲルマン祖語では *fot の複数形では語尾に *-iz がついていたが (表1)、i-mutation が起きて母音 o は e に変化し、*fot-iz は *fet-iz となる。しかし、*-iz という音節はゲルマン祖語から古英語になるまでに消失し、語幹の *fet

のみが残ったという経緯がある。従って、答えは、foot は英語になるまえに、fot の複数形の語尾に i の音が含まれていて、その影響で foot が feet に変化し、ずっと現代英語まで続いているとなる。

3.2 なぜ must に過去形がないのか？

現代英語では、法助動詞 can, may, will, shall には語形として過去形があるのに、must や ought (to) は現在形しかない。

表 2 現代英語の法助動詞の活用

現在形	can	may	must	will	shall	ought (to)
過去形	could	might	/	would	should	/

これは歴史的な発達の経緯をみれば、簡単に説明ができる。Must の語源を調べてみると²、古英語では *moste* であり、これは原形 *motan* (=to have occasion, be permitted or obliged to) の過去形であった。Motan はゲルマン祖語 **motan* に遡る。現代英語の *must* は古英語の *moste* が発達した語形なので、答えは *must* 自体が過去形だからである。

ところで、何故古英語ですでに *moste* という過去形が使われていたのかと言うと、古英語 *motan* は、もともと過去現在動詞³であったため、語形は過去形、意味は現在だった。原形の *mot*, *motan* は中英語期に廃れ、*moste* が現在形へと昇格した。

では、他の法助動詞はどのような変化をとげたのだろうか？ Can, may, will, shall はもともと現在形だったのかという疑問がうかぶかもしれない。can の語源をみてみると、古英語 *cann* は原形 *cunnan* (=to know) の 1 人称・3 人称単数現在形であり、語源はゲルマン祖語の **kin-*, **ken-* に遡る。実は、

2 法助動詞 *must*, *can*, *may*, *will*, *shall* の語源は、寺澤芳雄編『英語語源辞典』（研究社）を参照した。

3 過去現在動詞 (preterite-present verbs) とは、もとは強変化動詞であったがその過去形が現在の意味でつかわれるようになり、過去弱変化動詞の語尾をつけて過去形を作った動詞のことをいう。

cunnan も過去現在動詞であり、cann も語形は過去形だった。could は、古英語の単数過去形であった *cūpe* が中英語時代に発達した語形である。

次に *may* の語源をみると、古英語の語形 *mæg* は原形 *magan* (=to be able) の過去形であり、ゲルマン祖語 **magan* に遡る。これも、過去現在動詞で *mæg* という語形はもと過去形だった。現代英語で使われている *might* は古英語の過去 1・3 人称単数形 *meahte, mihte* が発達した形である。

Shall も、古英語では *sceal* と綴られ、原形 *sculan* (=to be obliged to) の過去形であった。*Sculan* はゲルマン祖語では **skal-*, *skul-* の語幹を持つ。これもまた過去現在動詞だった。現代英語の *should* は古英語の過去形 *sceolde* が発達した形である。

さらに、*will* の古英語の語形は、*wille* であり、原形 *willan* (=to wish) の活用形である。*Willan* は古高地ドイツ語 (Old High German) の *willon* に遡る。*Will* は今まで見て来た動詞と異なり過去現在動詞ではなく、変則動詞 (anomalous verb、いわゆる不規則動詞のこと) の一つである。*wille* は現在形で、*would* は古英語の過去形 *wolde* が発達した形である。

Ought (to) の発達の経緯は、*must* と良く似ている。*Ought* の古英語の語形は *ahte* であり、これは原形 *agan*(=own) という動詞の過去形であった。*Must* と同様に過去現在動詞であったため、すでに *ought* 自体が過去形である。そのため、現代英語において *ought* (to) にも過去形が欠けている。以下の表 3 に現代英語の法助動詞が古英語でどのような語形であったかを示した。太字で示した語形は、現代英語の現在形の語形が古英語のどの活用形から発達したのかを表している。

表 3 古英語における *cunnan*, *magan*, *motan*, *willan*, *sculan*, *agan* の意味と活用

古英語 原形	cunnan	magan	motan	willan	sculan	agan
意味	can, know how to	be able	be allowed to, may	wish	be obliged to	own
1, 3 人称 単数・現在形	cann (can)	mæg (may)	mot	wille (will)	sceal (shall)	ah
単数・過去形	cupe (could)	mihte, meahte (might)	moste (must)	wolde (would)	sceolde (should)	ahhte (ought)

ここで、過去形が現在形として使われるプロセスを整理してみたい。まず、古英語現在形の *mot*, *motan* は語形としては過去形だったが、古英語時代に現在のことを意味するようになった。これは過去形→現在形への転換第 1 回目である。それに加えて、古英語過去形の *moste* は現代英語では語形が *must* となり現在のことを意味するようになった。これで、過去形→現在形への転換第 2 回目となる。同じように、古英語現在形の *cann*, *cunnan* は過去形だったが、現在のことを意味しており、過去形→現在形への転換第 1 回目を経験した。次に古英語過去形の *cupe* は語形は中英語時代に *could* となった。その後、現代英語では現在のことを意味する用法を発達させている。例えば、

(1) Could you kindly show me how to get to the station?

という例文では、*could* は過去のことを指し示しているのではなく、現在の可能性を丁寧に尋ねている。従って、このような用法では過去形→現在形への転換第 2 回目が生じていることになる。法助動詞の発達において、過去形が現在形へとシフトする現象が繰り返されていることは、興味深い。

3.3 なぜ動詞は 3 単現のとき語尾に -(e)s をつけるのか？

この問いは、英語学習者ならば誰でも一度は疑問に思いつつ、答えを見つけない質問の一つであろう。単刀直入にまず一言で言えば、歴

史的には動詞が3人称単数現在るとき語尾に-(e)sをつけるのではなく、3人称単数現在るときだけ語尾が残ったということになる。古英語では、表4のように主語の数と人称による語尾変化があった。

表4 古英語 *singan* (=sing) の直接法現在形人称変化

	単数	複数
1人称	singe	singap
2人称	singest	singap
3人称	singeþ	singap

これらの語尾変化は、中英語時代には表5のように簡略化される。

表5.1 中英語における *singen* の直接法現在形人称変化 (南部方言)

	単数	複数
1人称	singe	singeth
2人称	singest	singeth
3人称	singeth	singeth

表5.2 中英語における *singen* の直接法現在形人称変化 (中部方言)

	単数	複数
1人称	singe	singeth
2人称	singest	singeth
3人称	singeth	singeth

表 5.3 中英語における *singen* の直接法現在形人称変化 (北部方言)

	単数	複数
1 人称	sing(e)	singes
2 人称	singes	singes
3 人称	singes	singes

中英語では方言により動詞の語尾変化が異なったので、3 人称単数現在形語尾は、南部と中部で *-eth* (表 5.1、5.2)、北部で *-es* 語尾 (表 5.3) と変化した。さらに時代が下り、初期近代英語期になると、語尾の簡略化はますます進み、語尾が付加されるのは 2 人称単数現在語尾の *-est* と 3 人称単数現在形語尾の *-es* と *-eth* のみになってしまう。*-es* 語尾は北部方言から南下し、南部の標準的な英語においてつかわれるようになり、この時代は 2 種類の 3 人称単数現在形語尾が並立していた (表 6)。しかし、16-17 世紀に徐々に古英語の 3 人称単数現在形語尾の *-ap* を反映した *-ep* は使われなくなり、*-es* が一般化する。後期近代英語期には、2 人称単数語尾 *-est* と 3 人称単数語尾 *-eth* が消失し、唯一 3 人称単数語尾 *-s* が残存することになり、ついに現代英語と同じパラダイムとなった。

表 6 初期近代英語における *sing* の直接法現在形人称変化

	単数	複数
1 人称	sing	sing
2 人称	singest	sing
3 人称	sings singeth	sing

では、この動詞 3 人称単数語尾 *-(e)s* はどこから来たのか？すでに中英語時代に北部では現在形の語尾は 1 人称単数をのぞいてすべて *-es* 語尾であった。これは、実は古英語において、すでに 1 人称単数を除いて *-as* 語尾であったことに由来している (表 7)。

表 7 古英語 *singan* の直接法現在形人称変化 (9 世紀 北方方言)

	単数	複数
1 人称	<i>singe</i>	<i>singas</i>
2 人称	<i>singas</i>	<i>singas</i>
3 人称	<i>singas</i>	<i>singas</i>

Crystal (2004: 218-9) は、古英語北方方言で広く *-as* 語尾が使われるようになった理由として、アングロ・サクソン人とスカンジナビアとの接触をあげている。

As the only influence in Northumbria during the ninth century was from Scandinavia, it [=the *-s* ending] must have been the result of contact between the Anglo-Saxons and the Danish incomers. [...]

In the first scenario, A[nglo-]S[axons] heard other *-s* forms in Danish speech, assumed they were present-tense forms, and began to use them as part of their own systems.

In the second scenario, Danes tried to use the English present-tense *-þ* forms, but mispronounced as *-s*. A[nglo-]S[axons] then found the *-s* forms congenial, eventually using them as part of their own system.

すなわち、アングロ・サクソン人は古ノルド語の *-s* 語尾を聞いて現在時制を表す語尾だと考え英語にも適用した。あるいは、デーン人は英語の現在時制を表す *-þ* 語尾を聞いたものの発音がうまくできず *-s* 語尾で発音してしまい、アングロ・サクソン人はそれを英語にも採用してしまったのではないかと推測している。アングロ・サクソン人の古英語とデーン人の古ノルド語の言語接触により、英語の語尾が大いに簡略化したことはしばしば指摘されるが、古ノルド語の文献が経年変化をたどれるほどに継続的にのこっているわけではないため、このような言語接触のメカニズムを実証することはきわめて困難である。

ところで、初期近代英語期には 3 人称単数現在形として *-es/-eth* 両方の語尾が共存していたことは既に述べた。以下に初期近代英語期の英語の代表と

して Shakespeare の例を挙げる。

- (2) Hermia: I give him curses, yet he gives me love.
Helena: O that my prayers could such affection move!
Hermia: The more I hate, the more he follows me.
Helena: The more I love, the more he hateth me. (MND 1.1.196)
- (3) Romeo: A gentleman, Nurse, that loves to hear himself talk…
(Rom 2.4.132)
- Nurse: Then hie you hence to Friar Lawrence' cell,
There stays a husband to make you a wife.
Now comes a wanton blood up in your cheeks, (Rom 2.5.68-71)
- Balthasar: Here's one, a friend, and one that knows you well.
(Rom 5.3.123)
- Friar Laurence: What torch is yond that vainly lends his light
To grubs and eyeless skulls? As I discern,
It burneth in the Capels' monument. (Rom 5.3.25-27)

1595 年の *Romeo and Juliet* では、一般動詞の 3 人称単数現在形の -th 語尾は頻度が低く、-(e)s 語尾 320 例に対して僅か 9 例であった (Tanabe 2015)。-eth から -(e)s への移行は社会的要因が関係していると考えられている。2003 年に Helsinki 大学の Terttu Nevalainen らによって構築された約 1000 通の書簡からなる初期近代英語書簡集のデータベース、The Corpus of Early English Correspondence (CEEC) が公開されて、書き手の social status, gender, ethnicity, age などの社会的要因による言語の使いわけの観察が可能になった。これを分析した結果によると、ちょうどシェイクスピアが劇作を行った 16 世紀末から 17 世紀初頭にかけてはちょうど古い語形 -es から新しい語形である -eth へ急激に移行する時期と重なることがわかった。そして、そのシフトは低い社会階層から始まり中流層、上昇志向の強い階層、上流階層へと広がっていった。いわゆる「下からの変化」である。また、こ

の変化は男性よりも女性が牽引した可能性もある。⁴

新しい語尾 -s は、上記で述べたように他の語尾が廃れてしまった後期近代英語期に唯一の現在形人称語尾となるが、なぜそれが現代まで残っているのかに関して、Gelderen (2006: 219) は規範文法が消失を阻止したためと述べている。出版や学校教育の現場で、厳しく 3 人称単数現在形語尾を付けるよう強いているため、英語本来の発達傾向としてもっている分析性が押しとどめられているとする。Curzan (2014: 4) も同様な考えを述べている。Curzan は、規範主義を遂行する現代におけるあらたな手段として、マイクロソフト社のワープロソフトである Word の Grammar Checker が無意識の内に利用者に規範に従うようしむけているとする (64-92)。

3.4 なぜ疑問文や否定文に do をいれるのか？

現代英語では、Do you speak English? / I don't speak English のように、助動詞 do を使って疑問文・否定文をつくる。これも入門期の学習者にとって習得しにくい文法の一つであろう。このように助動詞 do を使って疑問文・否定文を作る方法は、印欧諸語の中でも英語のみに見られる特別な操作である。古英語においては、疑問文は主語と動詞の倒置により作ることができた。語順だけを理解しやすいように、語彙を現代英語に書き換えてみると (4) のようになる。

- (4) Speak you English? (V+S+O?)
- (5) Avez-vous une chambre avec douche?
(=Have you a room with shower?)
- (6) Gehen Sie nach Berlin?
(=Go you to Berlin?)

(5) と (6) は、現代フランス語とドイツ語の疑問文であるが、古英語の疑問文と同様に主語と動詞の倒置によるものである。

4 調査結果の詳細は、Nevalainen and Raumolin-Brunberg, (2003: 122-3, 144-5) を参照。また、*Romeo and Juliet* における 3 人称単数現在形語尾の分布と社会的な要因の分析については、Tanabe (2015) を参照。

では、助動詞 do はどのように発達したのだろうか？古英語では do は一般動詞であり、原形は don であった。意味は、大きく分けて (i) to perform、(ii) to cause someone to do something (使役)、(iii) to put の 3 つがあり、(ii) の使役の意味で文を作ると (7) のようになる。

(7) He did John break the house. (=caused)

やがて中英語になると、don から使役の意味が消失した。

(8) He did (someone) break the house.

(8) は、「彼が (誰かに) 家を壊させた」(従来の使役の解釈) と「彼は家を壊した」(break の主語を he と解釈) と両方の解釈が可能になった。中英語では、使役であっても主語によって命じられた動作を行う目的語が明示されないことがおおかったため、本動詞 do と不定詞 break が隣接し、不定詞の主語を文の主語と同じと解釈できるようになった。このようにして、do は語彙的な意味を喪失し、時制を示すだけの機能語としての助動詞になった。以上は使役的な意味の do に起源をもつという説のアウトラインだが、do の起源については諸説ある。⁵

では、この助動詞化した do をなぜダミーのように疑問文に用いたかについては、英語では、疑問文においてダミーの do をつかって倒置をしつつ、本動詞と主語を倒置させことを避けて SV の語順を保つ傾向が強く働いたからという説明が可能であろう。図 2 に示されているように、助動詞 do は 1500-1700 年に急激に発達しているので、中英語時代に SVO の語順が確立し、ちょうど次の時代にその強力な語順を保とうとする力が特に強かったと言えるのかもしれない。

5 迂言的 do の起源は、他に代動詞としての do、予測的な do などがある。中尾・兎馬 (1990: 69-77) 参照。

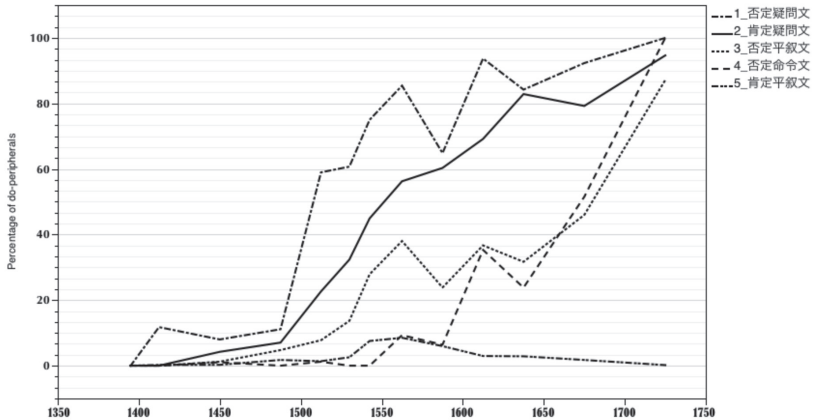


図2 助動詞 do の発達 (Ellegård, 1953: 161 の表より作成)

次に、否定文の発達について考察する。古英語では単に否定辞 *ne* をいれるだけで否定文をつくることができた (cf. *I ne speak English.*)。これも *ne... pas* で動詞を挟んで否定文を作るフランス語、*nicht* を挿入して否定文を作るドイツ語と良く似ている。否定文の発達のモデルは、Jespersen (1909-49: 426-30) が MEG で論じたものが有名である。表 8 はその発達をまとめたものである。第 I-III 段階の古英語・中英語時代においては否定辞 *ne* や *not* を動詞の前後に置いて否定文を作っていたが、第 V 段階からは迂言的な *do* が使われるようになり、現代英語の用法と同じになる。

表 8 否定文の発達段階

発達段階	時代	否定文
I	古英語	<i>Ic ne secge. (=I no say)</i>
II	初期中英語—15 世紀	<i>I ne seye not.</i>
III	後期中英語	<i>I say not.</i>
IV	16 世紀	<i>I do not say.</i>
V	17 世紀	<i>I don't say.</i>

表8をみると各時代で直線的に否定構文が発達して来たような印象をうけるが、家入(2007: 98-9)によれば、中英語時代には第I段階の‘Ic ne secge.’を中英語の綴り‘I ne say’に移したものの、第II段階の‘I ne say not’と第III段階の‘I say not’の3種類のヴァリエントが共存していた。

疑問文も否定文も18世紀の終わりには迂言的用法が完成するが、19世紀でも幾つかの動詞においては旧タイプが残存する。以下の(9)–(11)は、Austenの小説の会話部分にみられる疑問文、否定文の例である。疑問文でも否定文でも両タイプが共存し、また同じ動詞(ここではknow)でも倒置による否定文も迂言的doによる否定文も同時につかわれている。

(9) The girls stared at their father. Mrs. Bennet said only, “Nonsense, nonsense!”

“What can be the meaning of that emphatic exclamation!” cried he. “Do you consider the forms of introduction, and the stress that is laid on them, as nonsense? I cannot quite agree with you there. What say you, Mary? For you are a young lady of deep reflection…”

(10) Mary wished to say something very sensible, but knew not how.

(11) “What an excellent father you have, girls,” said she, when the door was shut. “I do not know how you will ever make him amends for his kindness; (Jane Austen, *Pride and Prejudice*, Ch. 2, 1813)

Austenの否定文で迂言的doがどの程度つかわれていたかは、末松(2004: 90-2)に詳しい。

最後にこのセクションの質問の答えは、次のようになるだろう。doは古英語時代は動詞だったが中英語時代から徐々に助動詞化し、本来VSと倒置することで作っていた疑問文は、SVの語順をたもつために‘Do SV…?’の語順に変化した。一方、否定文は中英語時代までみられた否定辞の自由な位置は、初期近代英語期の助動詞の発達とともに、be動詞やhave動詞も含む助動詞の後置に固定されるようになり、一般動詞の否定文でも助動詞である迂言的do+否定辞という語順が確立した。

3.5 Will と shall はどうちがうのか？

規範文法では、表9のように未来を表す will と shall は人称と意味によって細かな使い分けがあった。これは、17世紀の規範文法家の John Wallis が打ち立てたものであった (cf. Brinton and Arnovick, 2006: 370-1)。

まず、規範文法では単純未来と意志未来という用法の違いがある。単純未来は、話し手や主語の意志に関係なく将来おこることについて述べる用法で、1人称平叙文では shall が、2人称・3人称では will が用いられる。現代英語では1人称の単純未来は will が普通となっており、shall はイギリス英語の1人称に限定されている。単純未来の疑問文では、1人称が Will I go? のように will を使い、2人称・3人称では Shall you go?、Will he go? となる。単純未来に対して、意志未来は話し手や聞き手や主語の「意志」に関して用いられる用法である。話し手の「意志」を表すには、平叙文で1人称が主語の時は will を使うが、2人称と3人称が主語の時は shall となり、話し手の「意向」、すなわち文脈により「約束」や「脅迫」などの表現となる。Shall I go? や Shall we go? のような1人称の疑問文では、聞き手の「意向」を尋ねたり、「提案」をするときに使われる。Will you go? のように2人称の疑問文は、「依頼」を意味する。1人称で will が意志未来の用法となるのは、もともと will が「願望」を表す本動詞だったことに起因している。

このように単純未来と意志未来を人称ごとにわける規範文法のルールは、現代英語について最近出版された文法書をみても、もはやほとんどみかけない。その理由として、shall は19世紀頃から使用頻度が減少していて、規範文法の規則通りには使われなくなったことがあげられる。shall の減少は、特にアメリカ英語において先行して起きた現象で、口語では 'll と省略されて will との区別もつかなくなっており、最近では shall は消滅したと言っても良いくらいである。そのことを示す例として、以下に英訳聖書の訳文の比較を引用する。⁶

6 寺澤 (2013: 90) では、ルカ伝 1:35 に出現する未来表現を調査する Activity において、NRSV の will が King James Bible では shall であったことが指摘されている。また、三浦 (2014) もマタイ伝を資料として will と shall の異同調査をおこない、その結果、必ずしも20世紀の訳で shall から will への置換が規則的におきたわけではないが、Good News Bible ではほぼ will で訳されていることを明らかにした。

(12) ルカ伝 1 章 31 節

- a. (RV, 1881) “And behold, thou shalt conceive in thy womb, and bring forth a son, and shalt call his name JESUS.”
- b. (ASV, 1900/RSV, 1946) “And behold, you will conceive in your womb and bear a son, and you shall call his name Jesus.”
- c. (NRSV, 1990) “And now, you will conceive in your womb and bear a son, and you will name him Jesus.”

(13) ルカ伝 1 章 35 節

- a. (RV, 1881) The Holy Ghost shall come upon thee, and the power of the Most High shall overshadow thee: wherefore also that which is to be born shall be called holy, the Son of God.
- b. (ASV, 1900/RSV, 1946) “The Holy Spirit will come upon you, and the power of the Most High will overshadow you; therefore the child to be born will be called holy, the Son of God.

(12)、(13) では shall は RV (=Revised Version) では、2 人称・3 人称の意志未来、その延長の「予言」として使われている。RV は人口に膾炙した 1611 年の King James Bible の訳文をできるだけ損なわないようにしたため、通常の文書よりも保守的な英語がつかわれている。従って、19 世紀末でも shall が保持されているが、20 世紀に入って訳された ASV (=American Standard Version) と RSV (=Revised Standard Version) は、(12) の例中一箇所をのぞき will に置き換えられた。そして、その shall も 1990 年出版の NRSV (=New Revised Standard Version) では、ついに will になった。このように、保守的な聖書の訳文においても 19 世紀から 20 世紀にかけて shall の退行がはっきりとわかる。

Will と shall の違いは何かという質問に簡単に答えるには、以下のようになるだろう。以前は単純未来と意志未来の使い分けがあったが、現代の英語では単純未来でも will でよい。口語では省略されて、'll となるため、使い分け

は事実上ないが、2人称と3人称では話し手や聞き手、主語の意志を表す用法があるので注意が必要である。

4 まとめ

学習者の「なぜ○○なのか」という素朴な質問に答えを見いだすことは意外に難しいが、3節の例でみてきたように、英語史の知見はどのようにして現代英語の姿になったのかという歴史的経緯の説明を施すことを可能にする。学習者の興味や学習スタイルと英語力のレベルに応じて、ポイントを押さえた歴史的な解説をすることで、さらに学習効果が上がるであろう。また、そのために英語教員が英文法を歴史的な視点から学ぶことで、教えなければならないたくさんの文法項目のうち、なにが重要なのかをすることができる。そのことは教師に自信をあたえることに繋がると思われる。本論で取り上げた項目以外にも、2人称代名詞のみ単数・複数が同形であること、be動詞の活用が様々な語形を含んでいること、他のヨーロッパの言語に比べて英語に同義語が多いことなど様々な疑問の答えを英語史は提供することができる。英語史の知識が実際に「役に立つ」ことを期待する。

参考文献

第1次資料

Austen, Jane (2004) ed. James Kinsley, *Pride and Prejudice*, OUP, Oxford.

Bible Gateway, <https://www.biblegateway.com/>.

Evans, Blackmore (1974) ed. *The Riverside Shakespeare*, Houghton Mifflin, Boston.

The Bible, Containing the Old and New Testaments, Revised Standard Version, (1946, 1952) American Bible Society, New York. [RSV]

The Holy Bible, Containing the Old and New Testaments with Apocryphal / Deuterocanonical Books, New Revised Standard Version (1990) OUP, Oxford. [NRSV]

The English Hexapla: Exhibiting the Six Important English Translations of the New Testament Scriptures the Original Greek Text after Scholz (1975) AMS Press, New York.

StudyLight.Org, <https://www.studylight.org/>.

第 2 次資料

- Brinton, Laurel J. and Leslie K. Arnovick (2006) *The English Language: A Linguistic History*, OUP, Oxford.
- Crystal, David (2004) *The Stories of English*, London, Penguin Books.
- Curzan, Anne (2014) *Fixing English: Prescriptivism and Language History*. Cambridge, CUP.
- Ellegård, Alvar, *The Auxiliary Do: The Establishment and Regulation of its Use in English*, Almqvist & Wiksell, Stockholm.
- Gelderen, Elly van (2006) *A History of the English Language*, Amsterdam and Philadelphia, John Benjamins.
- 堀田隆一「hellog～英語史ブログ、#24. なぜ英語史を学ぶか」2009.5.22、
<http://user.keio.ac.jp/~rhotta/hellog/2009-05-22-1.html/>、2017.5.4 閲覧 .
- 家入葉子 (2007) 『ベーシック英語史』ひつじ書房 .
- Jespersen, Otto, (1909-49; 1983) *A Modern English Grammar Part. 5*, George Allen and Unwin, London; 名著普及会 .
- 久野暲・高見健一 (2004) 『謎解き英文法 冠詞と名詞』くろしお出版 .
- マーク・ピーターセン (1988) 『日本人の英語』岩波新書 18.
- 三浦桃子 (2014) 「聖書における英米語の差異」成蹊大学文学部英米文学科卒業論文 .
- 中尾俊夫・児馬修編著 (1990) 『歴史的にさぐる現代の英文法』大修館書店 .
- Nevalainen, Terttu and Helena Raumolin-Brunberg (2003) *Historical Sociolinguistics*, Pearson.
- Schmitt, Norbert and Richard Marsden (2000) *Why Is English Like That?: Historical Answers to Hard ELT Questions*, The University of Michigan Press.
- 末松信子 (2004) 『ジェイン・オースティンの英語—その歴史・社会言語学的研究—』開文社出版 .
- 田辺春美 (2015) 「Shakespeare の英語における 3 人称単数現在形語尾について—*Romeo and Juliet* の場合—」『成蹊英語英文学研究』19: 49-67.
- 寺澤盾 (2013) 『聖書でたどる英語の歴史』大修館書店 .
- 寺澤芳雄編 (1997) 『英語語源辞典』研究社 .